

八月四日。素庵淺井政右周忌也。菊池武康へ懷舊の一首贈之。
露消し秋は空しくめぐりきぬもとの淺茅は夢かあらぬか
返しとて

夢かあらぬかとの御ことの葉、あさからぬあはれも過
しかだく、とみに打思ふまゝなるみじかきことばも、
御返しと云ばかりにつらね奉るになん。

夢ととぶ秋風やなほ袖の露 秋 涯
懷舊の百韻、武庸・忠張兩吟。

別れしや思へば昨日けふの秋 武 庸
更に其世を見る袖の月 忠 張

一、初雁
さむしろやあかつきちかき萩の音に袖の露そふ初雁の聲
一、秋夜興その他
今夜月よし。初雁雲端におとづれ、萩花露おもくして一興
なり。

萩がえの露にうつろふゆふ月の影ほのかなるはつ雁の聲
武藏野や是もゆかりと故郷のたつきにしたふ雁の一むら
基庸よりせうそこのつゝで、予此ほど所勞に付、病がちな

るよしとぶらひをこせたるまゝ。
置せめし頭の霜は君やみぬ野邊の草木もとのいろかは
直清より左の一律到來。懷助信也。

秋 暮 鳩 巢
暮鐘何處發。流響到空堂。傍屋蜘蛛網。趨林鳥雀翔。窓前
親翰墨。雲際指家郷。月出忽回首。清輝在短牆。

和韻菊山主人懷舊
十年舊事總成悲。今日別君獨北之。郷路縱然秋景好。賞心
何似伴行時。

和師禮丈二篇之韻礎
入あひの聲する山につき見えてむすび初めたる霜の笹牆
ふるさとに我待人の手すさびにはらふやにはの露の袖牆
おくれぬて露をかたみの秋のそで恨やいづくなれし昔時
折々をしのぶの露はしげれどわきてかなしき月光の時
一、夢中感得の一詠
十二日。今晚夢中に感得下句、上句を案ずるとおもふ心地
ながらに、夢覺侍りけるに、いまだ覺やらぬ程に、便上句を
もまうけ侍りけるまゝ、不思議の趣向不堪感心起いで、

書付侍りし其歌。

眞帆ひきて霞をわくる朝ぼらけ風の跡ある和歌のうら船
さきの日、予二毛を歌作、直清にみせまゐらせて和を請侍
りけるに、左の一絶書付てたうべたり。

酬有禎兄以和歌見示因和絲字 鳩 巢

自一締交經幾時。行年未老髮先衰。生卒愁緒知多少。都
入鏡中化作絲。

一、清夜馬上口占
十四日。夕月殊清光。馬上の口號。
名にめで、猶ぞまたる、吳竹の一よ隔てし月のさやけさ

一、仲秋獨り月を詠む
仲秋獨支枕於燈下詠月、古詩を沈吟し、今夜の蜂腰を思
惟し、屈して睡覺めて空をうかゞふ。

そむくべき月の今夜のあきの雨うらみてむかふまどの灯
今夜とて必ず月のくもらずば中々秋の名やふりぬべき
必ずと思へばたがふ世中をことほり顔にくもるつきかな
二三更の程、雲間の影をかしげにさし出たり。

雨雲は風のまに／＼とだえして霧のひまもる武藏野の月

むさし野やむかへの岡に雨晴て小夜もなかばの秋の月影
須磨の浦や月も今夜に思ひ出てあはれ昔の夢をとふらん
曉をしらぬくらぶの山すみはいかに今夜の月をみるらん
萩の露よるの錦を宮城野や今夜のつきのくもりはてなば

一、菊池武康に贈る

十六日。今日於公館菊池武康へかく聞ゆ。

秋になほ名高き月の影よりも君がこと葉の花ぞまたれし
返 し

月かけも曇り果つ、降雨にいとどしをる、言の葉のいろ
扱歌と發句と書付たる

いつよりか秋の半に契おきて露にうつろふむさし野の月
月の名は如何にふりてもあまつ空

仲秋作

滄 浪 鳩 巢

疏雨成涓滴。幽人懶倚樓。雲連江上暗。月入笛中愁。鵜
斷他郷別。夢歸故國秋。候蟲如有意。卿々未曾休。

つらかりしきのふの雲は半空に思はですめる十六夜の月
一、菊池武康富士の歌
武康へ書集たる詠草一帖遣しける。返さるゝとて奥の富士